

まなざしと空気感 Eyes in 100 Years

調査理事 川村龍太郎



来年の2017年、電子情報通信学会はその創設から100周年の節目を迎えることになる。電子情報通信技術を研究開発する我々の先輩たちが集い議論を始めたのが1917年。この100年間は世界社会と当技術分野の双方にとって激動と言える時代だった。

調査理事の役柄、この創設100周年を記念する事業準備として、100年間の資料や写真を集める作業を実施しているのだが、これが非常に興味深いものばかりが出てくるものだから、つつい多忙の現実逃避しながら、それら資料に見入ってしまう。

創設された1917年と言えば世界は第一次世界大戦の真ただ中であつた。日本も1914年に参戦し、翌1918年の終戦を前に激しい戦いが世界を覆っていたまさにそのときの創設だった。この時代の資料を見ると無線通信技術や新たな写真電送への挑戦などが見て取れる。

その後の1930年代からの第二次世界大戦の時代、本会は20年余りがたち、人で言えば成人後の最もエネルギーに満ちた時代である。1935年には第一回の秋季大会が開かれているが、その開始理由として、最近の研究発表数の急増により既存の研究会だけでは場が足りない旨が記されている。一方この頃の資料には当然ながら戦争とその終戦の混乱が浮かんているし、写真に写る服装も多くを語っている。終戦時、日本の電話普及度は人口比で1.4%であり、それでも何年も掛けて敷設したものが戦火によりその75%が失われた無念さが語られている。

このように100年間の本会の歩みを、世界の情勢や大きな技術イノベーションの歴史とともに一気に見ていると、つつい時間を忘れてしまうのだが、その中でも際立って興味を持ったのは写真である。特に初期のものは現存するものが少なく、もちろん解像度が低いモノクロのものばかりだ。それでも多く残る文書にも増して訴えかけてくるのは先輩たちのまなざしとその場の空気感だ。特にその眼が主張している未来を開こうとする意欲、希望、決意、エネルギー。繰返したが解像度は目の判別もままならないほど悪いのだが、そこにはそれらがありありと現存する感覚、オーラを感じることができる。

これらの写真を見て同時に気付いたこと、それは今の私たちの周りの研究者、技術者の持つまなざしと「同じだ!」ということだ。最近、本会などの若手コミュニティやベンチャーを立ち上げ世界に挑戦している方々との付き合いが多くなったが、彼らのまなざしとそこから強く伝わってくる彼らの思いが、100年近く前の先輩たちと同じなのだ。技術で未来を開こうとするまなざしは、技術内容や世相やファッションが大きく変わっても同じなのかと。

現在、本会だけではなく多くの学術分野において学会が持つ役割の変革期にあると言われている。特に自身で開いた電子情報通信技術により知識流通を爆発的に加速させたことで、学会の役割の一つを自ら解き放った本会は稀有の存在であり、その課題先進集団として今後の新しい学会に求められる価値形成を次の100年に向かって進めることになるだろう。だけれど技術で未来を開かんとするこのまなざしを持つ若者たちが集う限り私は楽観的だ。